
平次と和葉の七日間戦争

千颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平次と和葉の七日間戦争

【Nコード】

N0127V

【作者名】

千颯

【あらすじ】

和葉と平次が離れてから半年。平次はふとしたことから、彼女が欲しくなった。とりあえず和葉を彼女にしようと画策するが・・・。「それでもアタシは恋をする」の半年後のお話。平次が主人公です。

(1) 一日目 彼女がほしい(前書き)

「それでもアタシは恋をする」の半年後のお話です。これだけでも充分楽しんでいただけます。が、どうしても和葉がこんな態度なのかは、「それでも」の第一章を読んでいただければ、よくわかります。

(1) 一日目 彼女がほしい

服部平次は悩んでいた。

というのも、彼女がほしくなったからである。

ずっと一緒にいた幼馴染の和葉と離れて半年近く。
何となく隣が寂しい。

気晴らしに東京の親友のところに行けば、当人は幼馴染兼恋人とい
ちやいちゃいちゃいちゃしている。
しかもその彼女は優しく可愛く恐ろしく強い。

「ふむ。」

平次は考えた。

自分も東京の名探偵とはひけをとらない存在だ。
(アイツにあつて俺にないっていうのもなんやな。やっぱり俺も、
あのレベルの彼女があらんとしまらんな。)

という訳で、彼女という存在が欲しくなったのである。

とりあえず自分に告白してきた女の子の中から選ばうとしたが・・・。

「・・・帯に短し、たすきに長し・・・とはよう言つたもんやな。」
今いちどの子もピンとこない。

可愛い子も多かったが、どうも自分の好みとは違つような気がする。
レベルを下げたり、自分のポリシーを曲げてまで、付き合おうとは思
わない。あくまで、自分の中の基準は、東京の親友の彼女以上レ
ベルなのである。

「ふむ。」

また平次は考えた。考えても考えても納得いく答えがでない。すると横からツレの声が聞こえてきた。

「あ、遠山や。」

「かわええなあ。」

つられて窓の外を見ると、中庭で楽しそうに和葉が笑っている。

「何や三年になってからますます綺麗になってないか？」

「おう、おれもそう思う！男でもできたんやろうか？」

「ああ、まじでかわええ。」

その声に、「和葉が可愛いなあ？」

平次は心底意外そうに言った。

「・・・お前、本当に遠山の可愛さがわからんか？」

「言うだけ無駄や。こいつ小さな頃から遠山や自分のオカンみたいな美人に囲まれてるから、求めるレベルが高すぎるんや。」

「・・・そうやな。それでみすみす遠山を手放したんやったな。お前は真性のアホや。」

あまりの言われように平次は憮然としたが、ふと思った。

そういえば、告ってきた女の子を見たとき「和葉の方がましやな。」
とか思ったような・・・

「ふむ。」

何だか答えが見えてきた。告ってきた子たちが、和葉以下だとしたら、とりあえず気心しれて楽な和葉を彼女にしたらいいいのではないか？

自分はそうは思わないが、ツレは和葉が可愛いという。周りの評価もばっちりだ。しかも強い。

「おし、それが一番お手軽でいいかもな。」

そうと決まれば、早速それとなく和葉の身辺を探ってみた。
どうやら和葉は今好きな人がいるらしい。

「・・・きつとそれは俺やな。」平次は呟いた。

決別したあの日、和葉は自分が大好きだった。と言った。

（あんな好き好き言ってたんやから、そう簡単に諦めきれるわけないもんな。）

平次は思った。

（しかし、なあ。あいつの性格からして、素直に言ってくるとは思えんし。どうせああはつきり決別宣言した以上、決まり悪くて言えんだけやろ。しょうがない。俺か水向けてやるか。）

どうしようか悩んだ末、最近まったく話してないことから、メールから始めることにした。

「『久しぶりに花見にでもいかんか？』送信つと」

・・・しかし、その返事は「送信に失敗しました。」というメッセージだった。

(1) 一日目 彼女がほしい(後書き)

平次、和葉にした仕打ちの数々はもう過去の事になってます。超ポジティブ！

(2) 二日目 ダイヤの原石

「何や。和葉のやつ、アドレス変えたんか？」

しょうがなく電話してみた。

しかし、無常にも「おかけになった番号は・・・」のメッセージが流れるだけ。

「という訳なんや、工藤。姉ちゃん、和葉の連絡先しらんか？」

いきなりかけてきた服部のあっけらかんとした口調に工藤は頭が痛くなった。

「・・・あのな、蘭より先に、学校のやつに聞けばいいんじゃないやねえか？」

「それがな、みんな知らん言うねん。和葉とはクラスが違うからあんま会わんし、いきなり本人に聞いてがつついてるって思われてもな。」

悪びれもなく言う。

「・・・あのさ、それ、和葉ちゃん、おめーと連絡取りたくねえんじゃないか？」

「ああ、あいつ意地っ張りやからな。だからこうして俺から、戻って気安いように水向けてやってんやないか。」

工藤は天を仰いだ。

(こいつは全然わかってねえ。)

工藤の沈黙を肯定と思った平次はさらに続けた。

「俺は可愛い思ったことなかったけどな、まわりが可愛い可愛い言うんや。やから和葉って、ひよっとしたら磨けば光るダイヤの原石なんやないかと思ってな。こりゃ先に手打つところかと。」

気絶しそうな工藤をよそに「俺って賢いやろ。かかかか」何が楽しいのか、平次は受話器の向こうで笑っている。

「お前・・・バカか！和葉ちゃんはな、す・で・に、かわいいんだよ。磨かなくてもダイヤモンド級なんだよ！」

「・・・そうなんか？」

工藤はがくつと肩を落とした。もうこいつとは長く話したくない。

「とりあえず、蘭を通じて和葉ちゃんにおめーが話があるみたいだ。って伝言しとくから、後は自分でどうにでもしやがれ。」

そついうと返事をまたず電話を叩ききった。

「新一？今の服部君？」

ぐつたりとソファーに寄りかかった工藤に蘭が声をかけてきた。

「ああ。」

「まさか今頃和葉ちゃんにちよっかい出そうとしてるんじゃないでしょうね。」

「そのまさかだ。」

「新一っ。」

蘭が仁王立ちした。

「和葉ちゃんがあんな辛い思いしたのに、何で仲介しようとするの！それに和葉ちゃんには・・・」

「わかってるよ、わかってる蘭。でもあいつは自分でわからせないと駄目なんだよ。」

工藤ははーっと息を吐いた。

「人の話全くきかねえし・・・。ああ、面倒くせえ。蘭、和葉ちゃんに連絡とつてくれねえか？」

蘭は最後まで嫌がったが、しぶしぶ和葉に連絡を取った。

その和葉からの返事は

「放置！」

その一言だった・・・。

(2) 二日目 ダイヤの原石(後書き)

ポジティブ平次ばく進中です。

(3) 三日目 あれ？

工藤に伝言を頼んだものの、一向に和葉から連絡がないので、平次は学校で和葉を捕まえることにした。

するとラッキーなことに、廊下を一人で歩く和葉を発見した。

「和葉！」

平次は声をかけた。

昔のように、くるつと振り向き、「平次！」と目を輝かせて駆け寄る和葉・・・を想像していた平次は、ただこちらをゆっくり見て、平次から来るのを待っている和葉を見て、あれ？と拍子抜けした。そして、いくら待っても来ないので、仕方なく平次は和葉の元に歩いていった。

「何？」

和葉はそっけなく言った。

「いや、なんか、久しぶりやな。」

「そうやね。で、何か用？蘭ちゃんにも伝言してたみたいやけど。」
和葉はそう言うつと平次を見た。

(何や、知つとんたんかい！なら連絡してこんかい！)

と平次は思ったものの、ここは自分が大人になり、つとめて平静な声で言った。

「ああ、久しぶりに二人で出かけんかと思ってな？花見でもいいし、映画でも・・・。」

そう言つて和葉を見ると、気のせいか眉間に皺が寄っている。

（あれ？）

また平次は意外な気がした。前は尻尾を振るような勢いで喜んでたのに……。

「悪いけど、アタシ、もうアンタとそういつの行く気ないから。話はそれだけ？ほな。」

取り付くしまもなく和葉は去っていった。

「という訳なんやけど、あいつ照れてるんやろうか？それとも半年もほたといたから、拗ねとんやろうか？」

当然電話の相手は工藤である。

「……どっちも違うんじゃない？」

「そうかな。中々難しいなあ。今素直に告ってきてくれればなあ。すぐ付き合ってやるんに。」

タイミング悪いやつかなと平次はぶつぶつ言っている。

工藤は飲みかけのコーヒーをぶつと吐き出した。

「……何だよ？その告るってのは？」

「あ、ああ。言っとらんかったか？和葉な今、好きな人がおるらしいんや。」

「で？」

「だから何で素直に告ってこんのかな。と思うてな。半年前の事、まだ気にしてるんかな」

工藤は頭が痛くなった。

「……ひよつとして、オメー、それ……自分のことと思ってる

のか？」

「は？何言つとんのや？俺しかおらんやろ？ほかに和葉が惚れる男が誰がおるねん！」

（はつとり〜）

工藤は想いつきり脱力した。駄目だ、もう俺の手には負えない。別の惑星の人間だ。

こいつの中で半年前のあの出来事は見事に昇華されている。

これは真実を告げてさっさとこの件から手を引くに限る。瞬時に判断して工藤は言った。

「あのな、言つてなかったけどな、和葉ちゃん彼氏いるらしいぜ。2月から。」

「・・・はつ？」

平次は絶句した。

「だ〜から、和葉ちゃん彼氏がいるんだよ！で、相手がちょっと有名で、色々噂されたら面倒くさいから、仲いい友達にしか言っていないんだよ！」

「ゆ、有名って・・・俺じゃないで？」

「だからおめーじゃねえつつうの！」

「だ、誰や？相手は？」

「教えねえ。」

「何でや？」

「教えたからおめー何かしそうだから。」

「何やそれ！お前友達やろ！もうええわ。和葉に直接聞いちゃる！」

電話を切ると平次は和葉の家に行った。

半年振りの和葉の家である。しかし躊躇することなく、

「和葉っ。」

平次は叫んだ。

しばらくして、和葉が嫌そうに玄関に出て来た。手には携帯を持っている。おそらくいきさつを工藤から聞いたのであるう。

「何なん？」

「お前、お前、彼氏おるて本当か？」

「そやけど。」

「な、何やそれ？俺は知らんぞ！」

「何であんたにいちいち言わなあかんの？」

「・・・相手誰や？俺が話しつけてやる。」

「はっ？何の話つけるん？」

「お前、あれや。お前みたいなブス、騙されてるんや。そうやる？お前みたいなのに本気になる男おるわけないやないか！だからその前に俺が話つけてやるって言うとなんのや！ありがたく思え！」

「・・・（怒）言いたいことはそれだけなん？」

「それだけって何や！はよ相手を教えんかい！」

「あんた頭大丈夫？」

「正気も正気、めちやくちや正気じゃ！その男と切れて、さっさと俺の処に戻って来い！」

ぶちん。和葉の何かがぶち切れた。ドアをつかむ手がわなわな震えている。

「・・・こんの・・・」力を貯めると大声で叫んだ

「とつとアタシの前から失せい！このドあほう！」

そういうと和葉は力任せにボタンとドアを閉め、がんとドアを蹴った。

「な、何でそんな怒つとんのや?」

和葉の怒りが全く理解できない平次はそれを呆然と見つめていた。

(3) 三日月 あれ？(後書き)

無神経平ちゃんパワーアップしています。

(4) 四日目 恋愛始めの醍醐味

服部平次は悩んでいた。

何でうまくいかないのか？

そりゃ半年前は少しひどいことをしたけど、あれは、和葉がおかしくなるのを止めるためにやったことで（若干本気入っていたけど・・・）

それは和葉もわかってたことで、和葉は俺をずっと好きだったわけ
で・・・。

あれだけ惚れてたんだから、当然今も好きはずで・・・。

おかしい。これでうまくいかないのがおかしい。しかも、俺から戻
って来いって言うたのに、何であんなに怒ったのか・・・。

「ふむ。」

また平次は考えた。

横ではツレが何やら雑誌を見ながら言っている。

「『まずはお互いを知ることから始めましょう。』か。そうやな、
意外な面を知ったら、ますます親近感わくもんな。」

「そうそう、惚れ直したりしてな・・・。」

ん？惚れる？平次は思わず振り返った。

「それ何や？」

「これか？彼女と仲良くする方法って特集組んでてな。色々勉強し
てん。」

「彼女ができてから勉強したんじゃ遅いからな。」

彼女おらんのに、勉強してって・・・、先にすることあるやろうが！と腹の中で突っ込んだが、あえてそこはスルーした。しかし、何かがひっかかる。

「それどんなんや？」

平次は尋ねた。

「彼女ができてすぐにやることらしいわ。一つ一つお互いを知るとな、愛情が沸くらしいぞ。」

「ほー。」平次は興味なさげに言った。

でも何かがひっかかる。

「そうよな。相手の色んなところ知っていくときのドキドキ感！あれはたまらんやろうな。俺だけ知ってるコイツみたいな。」

周りはまだもり上がっている。

「恋の駆け引きで焦らしたり焦らされたり。それが恋愛の醍醐味やもんな。あゝ俺もやってみたいわ。」

恋の駆け引き・・・恋愛の醍醐味・・・誰でもやってみたい・・・？

「・・・なあ、それ、お互い知り尽くしたものの同士が恋愛始めの場合はどうするんや？」

平次は尋ねた。

「ん？そりゃ新鮮味のうて面白ないんちゃう？」

「そうそう、長年連れ添った熟年夫婦みたいな。」

・・・

「あつ。」

平次はひらめいた。

・・・そうか、そうやったんか！

突然平次は立ち上がると教室の外に走っていった。

「服部どうしたんや？」

「さあ。」

クラスメートは呆然とその背中を見送った。

廊下を猛ダツシュした平次は、そのままある教室に入ると「和葉！」
大声で和葉を呼び出した。

友人達と談笑していた和葉は、「何事？」と振り返ったが、その瞬間きれいな眉を顰めた。

（また、無駄にきらきらしてからに・・・絶対ロクな事考えとらんわ。）

二人は屋上に上がる踊り場に行った。

「何？」

和葉は口を開いた。

「俺わかったんや！」

平次はにこにこしている。

「だから何が？」

「・・・お前あれや、恋愛始めの醍醐味が味わいたくて、男作ったんやろ？」

「はっ!？」

今にも目玉が飛び出そうになって驚く和葉を横に、平次は自分の推理に満足して「うんうん。」と頷いている。

「あれやもんなく俺ら今更お互いを知る醍醐味がないもんなく。」

「な、何やて？」

「やから、俺とじゃ醍醐味が味わえんから、男作ったんやろ?でも、それは早計やで。お前が知らん俺もあるわ!」

「・・・」

あまりの突拍子のなさに、声も出ない。和葉は眩暈がした。

(こ、これや・・・平次と一緒にあって時々感じる脱力感は・・・。よくもまあ、?Q180もありながらこんなアホなことを・・・)

「それで？」

何とか立ち直った和葉は平静を装って言った。

「ん?だからな、お前の気持ちもわかるし、男作ったことは許したるから、俺の彼女にしちやる!」

「は?彼女!？」

「そう、彼女!最近俺、彼女欲しいねん。色々探したけどあんまぴんと来んでなく。けど、お前やと気心しれてるし、ちようどいいかと。」

それにオカンも喜ぶしなあ。と平次はのほほんとしている。

和葉は怒りに震えた。

(・・・半年前のアタシの心の傷と涙を返しやがれ、このドあほう!)

「・・・アンタ・・・」

「なんや？俺理解あるやろ」

平次は得意そうな顔をしている。

和葉は大きく息を吸って叫びだした。

「こんのおっつドアホっ！ちようどいいってなんじゃ？アタシはモ
ノちゃうで？それにな・・・」

一旦区切ってさらに大きな声で叫んだ。

「アタシはなあ、大好きやから彼と付き合っとんのじゃこのボ
ケ」。

至近距離で力一杯叫ばれた平次は、また呆然と立ちすくんだ。

(4) 四目 恋愛始めの醍醐味(後書き)

半年前の決別は、平次と和葉の受け止め方では、蟻と象ぐらいの違
いがあります。

(5) 五日目 和葉の彼氏

「うゝ」平次は唸りながら廊下を歩いていた。

和葉は好きだから、彼と付き合っていると確かにそう言った。

おかしい。和葉は俺が好きなんじゃなかったのか？

「うゝ」もう一回唸った。

昨日あれから工藤に電話したが、着信拒否されてるのか、全然繋がらなかった。

「わからん。」

独り言をいいながら歩くと、格技場の前に人がたかっている。

「なんじゃ？」

剣道場の前に自分のファンがたまることはあっても、合気道などが活動している格技場に人が集まるのは珍しい。

「誰かおるんかな？」

覗いた人垣の隙間から、ちらつと長身の男が見えた。

腕を組んでドアに寄りかかり、中を見ているようである。帽子を目深に被っているので、顔はよく見えない。

もつとよく見ようと前に行った瞬間、休憩時間になった和葉が奥から駆け出して来た。

嬉しそうに顔を綻ばせ、男を見上げている。

(ひょっとしたら、あれが和葉の男か？)

とりあえず男の顔を見ようと前に行こうとしたが、ますますまわり

が騒がしくなったので、平次は諦めてその場を離れた。

ま、男の面は部活の後でゆっくり拝んでやるかと思っていたら、2人は行き違いで先に帰ってしまっていた。

仕方なく帰路についた平次は、偶然通学路の途中にある公園で、和葉とその男を見つけた。

思わず物陰に隠れて様子を窺う平次。

2人は向かい合って立っている。男が何か言っていると和葉が顔を上げた。その和葉の頬を男は愛おしそうに撫で、和葉はその上に自分の手を重ねた。

しばらくそのまま見つめ合った2人は、ふっと微笑みあった。

そして男は壊れ物を扱うように和葉の両頬を包み、首を傾けそつと和葉にキスをした…

それは見ているだけで、お互いがお互いを大切に想い合っているのがわかる、甘く切ない光景だった。

しかし…

（おー、ちゅーしよった！）

…ここにそれが理解できない人間が一人…

でも、平次は2人がとてもキレイだと思った。

「ええなあ…」思わず平次は呟いた。

「オレもあんなキス、やってみたいわ…」

そう呟くとそつとその場を後にした。

(5) 五日目 和葉の彼氏(後書き)

彼が威嚇にやってきました。

(6) 六日目 ほなキスしよか

家に帰って、何をして、頭から離れない先ほどの光景。

「やつぱええよな」

平次はベッドに寝転がりながら呟いた。あの時の和葉はとてもキレイだった。

・・・やつぱり自分もやってみたい。

そう思いだしたら居ても立つてもおられず、次の日、和葉の家に行ってみることにした。

「こんばんは、おばちゃん、和葉おる？」

「あら、平ちゃん、久しぶりやね、和葉なら部屋におるよ」

「上がってええ？」

「ええよ。」

平次は上がると和葉の部屋をノックした。

「和葉入ってええ？」

「平次？」

訝しがる和葉を無視して、部屋に入ると、単刀直入に言った。

「お前昨日、ちゅーしよったやろ？」

「はっ！？あんた何で...」

和葉が真っ赤になって口をパクパクしている。

「公園でみた。って、それはいいんやけど...」

・・・次の瞬間、平次は真顔で爆弾を落とした。

「オレもあんなキスしてみたいねん！キスしてええ？」

「はあああああ？」

あまりの展開についていけない和葉に構わず、平次はじりじり近づいた。

「な、何で…」思わず後退る。

「いやな、何かな羨ましかつてん。でな、オレもやってみたくなつたんや。」

「…」

「な？ええやろ？」

ボンと和葉の肩に手をおいた。

・・・そして顔を近づけたその瞬間、平次は床に投げ飛ばされた。

「こんのど阿呆！なにが、『な？ええやろ？』や！おのれのその賢いオツムは何のためにあるんじゃっ！」

真っ赤な顔でそう叫ぶと和葉は部屋を出て行った。

「お母ちゃん、お母ちゃん！」

大声で呼びながら和葉がドストロス降りてくる。

「どうしたん？」

「あのアホ二度とうちに入れんというて！」

「あらあら、ケンカ？」

「そんなんちゃうつ！とにかく、アタシが帰るまでに、あのアホ追出しというてよ！」

そういうと和葉は家から出て行こうとした。

「ちよっ、和葉どこいくん？」

「コンビ二！」

バンッ。勢いよくドアが閉められた。

「あらあら」

和葉の母は肩を竦めると、きまり悪そうに立っている平次に声をかけた。

「なんしたん？」

「ちよつと」

「ふゝん。ま、和葉も彼氏できたし、今まで通りには難しいかもなあ。」

「おばちゃん、知つとるん？」

「知つとるでゝえらいイケメンでな。昔のうちの人のみたいやわゝ」

「・・・」

赤くなるおばはんを平次は冷たい目で見た。

和葉の母はそれに気付かず続ける。

「まあ、顔云々はおいとしても、本当に和葉を大事にしてくれててな。特に和葉を優しく抱きしめる仕草がまたええんよ。」

「だ、抱きしめるって、おばちゃん見たんか！」

「見たでゝうちまで送ってきた時はいつも門の陰でぎゅっ」と。あの横顔もまたかつこ良くてなゝ」

和葉の母はうつとりしている。

「…おばちゃん、それ、どこから見たん？」

和葉のうちの門の陰はリビングから見えないはず。

「ん？トイレ。」

（覗き見かい！？オバハン！！）

「それにしても・・・和葉は平ちゃんと付き合っと思って思ったけど、残念やったなゝ。」

「残念って・・・。」

「平ちゃんには和葉のよさがわかってもらえんかったってことやる？」

「……」

「でも、まあ、今いい人に出会えたから、それはそれで良かったのかもなあ。」

本当に残念やったけど。と呟きながら、何も言えない平次に和葉の母は優しく微笑んで言った。

「でも、また遊びにおいで、平ちゃん。あんたらのどつき漫才がみれんとおばちゃん寂しいわ。」

どんよりした夜空の下、平次は肩を落としてとぼとぼ帰っていった。

(6) 六日目 ほなキスしよか(後書き)

タイトル見て、キスしたと思った方すみません……。今回はシリ
アスなシーンはないです。絶対。

(7) 七日目 本当の好き

平次はまた悩んでいた。

和葉が自分より誰かを好きになって、付き合う。というのがどうしても理解できない。

(お前、心底オレに惚れてたんちゃうんかい!?)

初めは、和葉は真面目だから、相手に遠慮して自分を受け入れないと思っていたが、どうも違う。本当に好きなようだ。

でも、自分の方が好かれているはず。という根拠の無い自信が自分の中にはある。

それならば、自分よりあの男がいいという理由は何か・・・

(そういえば・・・)

平次は、はたと気が付いた。自分は和葉に「彼女になれ」とは言うたが、好きだとかそういう甘い言葉を吐いた事がない。

ツレの話によれば、女はそういうのに弱いらしいし、だから、そんな言葉を簡単に吐ける男と付き合ってるのではないか？

そう思うと、和葉の一連の行動に納得がいった。

そうとわかれば、さっさと言うに限る。

別に和葉には相変わらず恋愛感情はないが、「嘘も方便っていうしな。」と、とりあえず、和葉を彼女にするために、好きということにした。

「今度は何なん？」

また踊り場に呼び出された和葉は不機嫌そうに言った。

「和葉、お前のことが好きや。」

「・・・はっ？」

「だから、お前の事が好きなんや。彼女になれ。」

「・・・いやや。」

速攻で断られて平次はぽかんと口を開けた。

「お前・・・俺が好きやなかったんか？」

「好きやったよ？前はな。」

「じゃあ何で・・・」

「だ〜から、『前』好きやったって言っただろ？・・・じゃあ、アタシも聞くけど・・・アンタ、アタシの事、本気で好きやないやろ？」

「・・・好きや。」

和葉は平次の目を見つめた。そしてはあっと息を吐くといった。

「・・・嘘つかんというて。平次。」

「嘘やない。」

「嘘や。何年あんたの幼馴染やっと思ってるの？バカにせんといて。」

平次は何も言えなかった。

そんな平次を見てふっと笑うと和葉は言った。

「どうせ嘘でもそういうこと言ったら、アタシが喜ぶとも思っただんやろ？」

平次は素直にこくと頷いた。

「残念やったな、平次。アタシ、本気で好きな人から、本気の『好き』って言葉もらったんや。本当に今幸せでな。やからアンタの嘘の『好き』なんか・・・、い・り・ま・せ・ん。」

最後の言葉を区切って言われ、平次は驚いて目を見開いた。

一方の和葉は「昔のアタシやったら嘘ってわかってても、喜んだやろうけどなあ。」とあっけらかんと笑っている。

「なんや、お前・・・。ほんなら、昔やったら騙されてても、喜んでオレの彼女なったんか？」

「そりやなつたやろうな。でも・・・」

和葉はいたずらっぽく笑った

「結局は嘘もんやから・・・絶対長続きせんかったと思うで。」

平次は少しショックを受けた。

「それにしても、もう好きな人できるって、お前少し薄情ちゃうか？」

「アタシの事好きになってくれなかった人に、そういう事言われる筋合いはあ・り・ま・せ・ん。」

また、きっぱり言われてまた凹んだ。

「・・・オレ・・・オレは・・・お前だけは、オレをずっと好きでいると思うとった。ほいで、お前はオレとおらんと絶対幸せじゃないと思うとった・・・。」

「そっか・・・。アタシもそう思うとった時期もあったな。でもな、平次、人の心は変わるもんやで・・・。」

「・・・変わる?」

「そう、変わるんや。だからアタシは今の自分の気持ちを大事にしたいねん。」

そう言つてにつこり笑うと、

「ほなな。アンタも早う本気で好きな子作り〜」

和葉は軽く手を上げて階段を降り始めた。

「和葉っ。」

平次は思わず呼び止めた。

「何?」

「いや・・・何でもない。」

和葉はにつこり笑つて頷くと、もう振り返らず去っていた。

平次は初めて感じる喪失感に、その場から動く事もできなかった。

(おまけ)

「という訳でな、和葉を彼女にする計画は一旦は諦めることにしたんや。」

「・・・一旦???」

「いやな、和葉の言い分によると、将来的には気持ちが変わるってことやろ?そんな時にまた言えいいかって思つてな。」

「・・・服部・・・ひょっとして、オメー国語苦手だろ?」

「へ？ああ、理数系はいいんやけど、どうも国語の読解が苦手だな。でも、ようわかったな？」

「・・・なんとなくな・・・じゃあ、頑張れよ。服部。」

「おう！受験頑張るわ！ほな、またな。」

「（受験じゃねえよ・・・）おう。またな。」

工藤新一は、とてつもない疲労感に襲われ、ぐったりとソファーに寝転んだ・・・。

「服部・・・頼むから、同じ大学には来ないでくれ。」

その小さなお願いは、叶うのか・・・！？それはまたの機会に・・・。

おしまい

(7) 七日目 本当の好き(後書き)

終わりました！ありがとうございます。

この平次の根底には「和葉はオレが好きなはず！オレとないと幸せではない！」という気持ちがあります。でも、自分は和葉には恋愛感情が持てないんだな、これがまた・・・。

最初はシリアスに書いてたんだけど、平次がすごいやなヤツになってしまったので、ラブコメに変更しました。それが楽しくて、本編の最終話よりこっちが先にできたという・・・。次はぼちぼち短編を投稿していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127v/>

平次と和葉の七日間戦争

2011年9月13日10時10分発行